束為文学における物語性[1]

内　藤　忠　和

１．はじめに

１．１　束為（1918－1994）について[2]

李束為、本名束学礼、束為はペンネームである。1918年11月山東省東平県朱家管村に生まれる。抗日戦争勃発後八路軍に参加し、兵士として山西省各地を転戦した。1940年秋、所属していた呂梁劇社に従って延安に移り、魯迅芸術学院戯曲系で学んだ。この時期国内外の名作を読み漁り、とりわけチェーホフ・モーパッサンを好んだ。1942年冬、学業を畢えて山西に戻る。晋西北文聯が組織した文芸工作団の一員として農村に入り、減租減息運動に従事した。この時の経験を描いた短編「租佃之间」が延安『解放日報』(1943年８月３日・４日）に掲載され、作家としてのデビューを果たす。

1944年秋には、『晋綏大衆報』に転属となり、編集を担当した。この時期、「土地和它的主人」(1946年),「红契」(1946年),「第一次收获」(1948年）など、共産党支配地区における農民の闘争と解放を描いた短編を数多く発表し、作家としての地位を確立する。

1949年、中華人民共和国成立後も山西に留まり、省委宣伝部文芸処処長，山西省文聯主席などの要職に就き、以後10数年にわたって文芸雑誌の発行及び若手作家の育成に尽力した。また自身も農村に入って取材を行い、「春秋图」(1950年),「好人田木瓜」(1958年),「老长工」(1958年),「于得水的饭碗」(1959年),「迟收的庄禾」(1962年）など社会主義建設期の農村を題材とした佳作，問題作を発表し続け、趙樹理，馬烽，西戎らとともに文学流派“山薬蛋派”の形成に大きな貢献を果たした。

文化大革命期間中は、山西省文芸界の指導者であったこと，50年代後半に党の農村政策に対して批判的な発言をしたことが問題視されて迫害を受け、労働改造を強いられ、また後には監獄に入れられもした。文化大革命終結後は名誉回復を果たし、1992年５月には山西省委員会・省政府から“人民作家”の称号を授与される。1994年３月４日、病のため太原でこの世を去る。

束為は山西省出身の作家を中心として構成される文学流派“山薬蛋派”の一

員である。馬烽・西戎ら主要メンバーが皆一度は外地に出ているのに対し、彼はひとり山西の地に留まり農村と農民を題材とした作品を描き続けていた。主要作品集に小説集『第一次收获』(1948年晋綏辺区出版社),『老长工』(1958年山西人民出版社),および『束為文集』(2004年山西人民出版社)がある。

１．２　先行研究

束為の作品に対する評価・研究は、1946年に発表された「评「老婆嘴退租」」(力群『晋綏日報』)から始まり、以後1950年代から60年代にかけて、「「老长工」的阶级感情」(沈思)[3],「评「南柳春光」」(李芝)[4]など全て個別の作品を対象とした評論が続いた。1980年代に入って「束为和他的创作」(肖河)[5],「严峻生活的真实反映-读束为小说断想」(劉金笙)[6],「从战士到作家-李束为的生平与创作」(楊品)[7]といった束為の生涯と創作の全体像を視野に入れた研究が登場し、農村読者を対象とし続けた彼の作品には独自の主題選択・人物造形法・方言の使用、といった個性が存在することが指摘された。

また、同じく80年代に束為もその一員である“山薬蛋派”を巡る研究も大きく進展し、この作家グループが【山西省の農村を舞台とし、そこで発生した問題を題材としている】・【農村読者を意識して物語性を重視し、描写よりもストーリーの叙述を優先する】といった特徴を共有していることが明らかにされた。

このように、束為と“山薬蛋派”の間には農村読者を意識した題材と手法、という点において共通点を見出すことができる。しかしこうした“山薬蛋派”的な作風はいつどのように獲得(あるいは喪失)されたのか、という視点が従来の研究には欠けている。

１．３　本稿の目的

近年、論者は“山薬蛋派”の作家たち—趙樹理,馬烽,西戎,胡正,孫謙の作品の物語構造を年代順に分析し、その結果、全ての作家が;【西洋から受容した近代文学的作風から出発し、後に農村読者を意識した“山薬蛋派”的作風を獲得する】・【後年“山薬蛋派”的作風が解体され、西洋近代文学的作風へ回帰する】という相似形の軌跡を描きつつその作風を変化させていることを明らかにした[8]。

本稿では、『束為文集』所収の小説28篇を対象に、語り手,叙法,順序の各

視点からその物語構造を分析し、束為の文学の変遷の軌跡を概観する。この作業を通じて国内ではまだあまり知られていない束為の文学の全体像を紹介するとともに、“山薬蛋派”の作家たちはどのような物語をどのように語ろうとしていたのか、明らかにすることができると期待している。

２．語り手

まずは作品世界を紡ぎだす存在―語り手の在りようから分析を始める。

本稿で対象とする束為の作品28篇のうち、語り手が物語世界内部に登場して物語るタイプ、すなわち「物語世界内の語り手」を採用している作品は28篇中８篇、語り手が物語世界の外部から物語る「物語世界外の語り手」を採用している作品は28篇中20篇である。このデータを“山薬蛋派”のほかの作家と比較すると以下の表のようになる；

	趙樹理	馬烽	西戎	胡正	孫謙	束為
物語世界内	0	15	11	6	8	8
物語世界外	32	26	34	20	14	20
総　数	32	41	45	26	22	28

このように、“山薬蛋派”の作家は全て「物語世界外の語り手」を主に採用していることがわかる。さらに論者が各作家の採用している語り手の在り様を年代順に分析したところでは；趙樹理の作品には全て「物語世界外の語り手」が採用されているが、創作活動の後半において【透明な語り手⇒内的焦点化⇒物語言説に介入して物語をコントロールする語り手】という変化が存在している[9]。また馬烽・西戎の作品においては「物語世界内」⇒「物語世界外」⇒「物語世界内」という語り手の立ち位置の変化と【透明な語り手⇒介入する語り手】という変化が見いだせる[10]。胡正・孫謙の作品においては「物語世界内」⇒「物語世界外」という立ち位置の変化のほかに【介入する語り手⇒積極的に論評する語り手】という変化が存在している[11]。では束為が採用する語り手はどのようにその在りようを変えているのであろうか？

２．１　物語世界外の語り手

上述の通り、束為の作品において「物語世界外の語り手」は28篇中20篇に採

用されている。１章においても言及したが、農村読者を対象とし、農民が好む物語の叙述を重視する“山薬蛋派”各作家の作品において、このタイプの語り手が多用されるのは不思議なことではない。但し、束為の作品においては「物語世界外の語り手」の登場時期に彼の独自性を見出すことができる。

２．１．１　デビューから解放前（1949年）まで

“山薬蛋派”主要作家のうち、最年長の趙樹理（1906-1970）を除く馬烽（1922-2004），西戎（1922-2001），胡正（1924-2011），孫謙（1920-1996），束為（1918-1994）の５名はほぼ同世代であり、皆一度は兵士として従軍した後、1940年前後に延安魯迅芸術学院で文学および戯曲を学んだ経験を共有している。

延安での学習を終えた束為は、1942年の冬に山西の地に戻り、晋西北文聯が組織した文芸工作団の一員として河曲県曲峪村に派遣され、減租減息運動に従事した。翌43年４月には支部書記王福喜の求めに応じて現地での見聞をもとに「租佃之间」を執筆し[12]、作家としてのデビューを果たす。この短篇小説は、小作人二小子と六十四が地主金卯の悪巧みにより一度は仲違いさせられるが、後に団結して金卯のたくらみを見破って闘い、小作料の引き下げを認めさせるまでを描いたストーリーである。本作には「物語世界外の語り手」が採用されており、また地主の策謀（【問題】）を見破って小作料の引き下げを達成する（【解決】）という強いストーリー性を見出すことができる。同年、小作人たちが地主の譲歩を引き出すまでの一幕を描いた第２作「谈判」を『抗戦日報』に発表する[13]が、この短篇にも「物語世界外の語り手」が用いられている。

1944年秋、馬烽・西戎らとともに『晋綏大衆報』編集部に異動となり、編集活動の傍ら民間故事の整理・収集や自身の言語の大衆化に努めた[14]。この時期の活動の成果は、1946年春から夏にかけて雑誌『人民時代』に集中的に発表されることになる。

まず４月１日発行の『人民時代』１巻７期に発表された「劳动英雄温象栓」[15]には「物語世界内の語り手」（＝「我们」）が採用されているが、語り手「我们」は貧しい農民であった主人公が減租減息運動をきっかけに生まれ変わり、労働英雄になるまでを【描写を排した語り口】で語っており、その語りの在りようは「物語世界外の語り手」に近い。続いて５月１日発行の１巻９期に発表された「放羊娃李三孩」[16]には再び「物語世界外の語り手」が採用され、親の仇を取るために民兵になることを熱望した羊飼いの少年李三孩が手柄を立

てて入隊を許可されるまでを【直線的な時間軸】を用いて描いている。そして７月１日発行の２巻１期に掲載された「土地和它的主人」は、「物語世界外の語り手」の眼差しを通じて主人公王海生が共産党政権の指導の下、減租運動に取り組み、地主に奪われた土地を買い戻すまでを描いた短篇であり、本作の段階において【物語世界外の語り手の採用】・【叙述優位の語り口】・【直線的な時間軸を通じて【問題⇒解決】構造を展開する物語】といった“山薬蛋派”の特徴を全て見出すことができる。以後『人民時代』誌上に発表された「老婆嘴退租」（２巻２期　７月15日），「红契」（２巻３期　８月１日）においても引き続き「物語世界外の語り手」が採用され、農民が小作料や土地をめぐって地主と闘争し、成果を勝ち取る物語が語られる。

このように、束為は1946年に発表した作品群において“山薬蛋派”としてのスタイルを形成していたことが分かる。こうした“山薬蛋派”独自のスタイルは、1940年の段階でいち早く獲得している趙樹理を除き、他の“山薬蛋派”の作家たちも束為とほぼ同時期、1940年代後半において完成させている[17]。

但し、本章の冒頭でも概観したように馬烽，西戎，胡正，孫謙のデビュー直後の作品群にはほぼ全て「物語世界内の語り手」が採用されており、語られる物語も作家自身の兵士時代の経験を描いたものであった。その後、馬烽らは各自その作風を語り手・叙法・順序・題材などほぼ全ての面で“山薬蛋派”的なものに方向転換していったのだが、束為の場合、デビュー作の段階で既に“山薬蛋派”の特徴をある程度備えていたと言える。

1948年夏から秋にかけて、束為は『晋綏日報』に短篇を３作発表している。このうち、「物語世界外の語り手」が採用されているのは「卖鸡」（1948年９月16日）のみであり、「第一次收获」（1948年７月22日）および「十年前后」（1948年９月27・28日）には「物語世界内の語り手」が用いられている。しかし「第一次收获」は作家自身を連想させる語り手「我」（＝“老束”）が、土地改革を経て生まれ変わった何来生一家の事績を語った作品であり、「十年前后」も主人公趙満満が土地改革をきっかけに生まれ変わり、嘗て離散した妻子を取り戻すまでを描いた物語である。どちらの作品においても語り手は事件の目撃者としての役割以上のものは演じておらず、言わば【「我」が他者の物語を語る】タイプの語り手であり、「物語世界外の語り手」に比較的近い立ち位置にあったと言える。

２．１．２　1950年代以降

1949年、国民党との内戦に勝利しつつあった共産党政権はその勢力範囲を拡大し続け、解放区の幹部もそれに従って南下し、現地の政権運営に従事するようになる。束為と共に延安で学び、創作活動を続けていた馬烽，西戎，胡正，孫謙は皆前後して北京，四川，東北などの地に旅立ち、彼一人が山西に留まって山西文芸界を担うことになった。この後10数年間にわたって山西省宣伝部文芸処処長・山西文聯主席としての職務をこなす一方、主宰していた雑誌『火花』を一流誌に成長させ、数多くの若手作家を育て上げた。束為はこうした激務の合間にも絶えず農村に入って取材を怠らず、自らの執筆活動を継続している。

解放後の束為の創作活動は「春秋图」(1950年)[18]から始まる。本作には「物語世界内の語り手」が採用されているが、これも40年代終わりの作品同様、【「我」が他者の物語を語る】タイプの語り手であり、講談師のように自らの語る行為を物語言説の中に登場させる語り口は同年に発表されている趙樹理の「登記」を連想させる。

数年の空白をおいて1954年に発表された「初升的太阳」[19]には「物語世界外の語り手」が採用されているが、続く「缺粮户」(1955年)[20]には【「我」が「我」自身の物語を語る】タイプの語り手が用いられている。その後「谁是放火者」(1955年)[21]，「过时的爱情」(1957年)[22]の２作に「物語世界外の語り手」が登場するが、再び1957年から58年にかけて「难忘的印象」(1957年)[23]，「好人田木瓜」(1958年)[24]，「老长工」(1958年)[25]と集中的に「物語世界内の語り手」が採用されている。

このように、1950年代半ばから後半にかけて「物語世界内の語り手」の登場頻度が高くなっているが、この時期の「物語世界外の語り手」の在りようにも変化が見出せる；40年代の作品において、束為の作品の語り手は概ね物語世界の外に立ち、物語の叙述を優先する語り口で物語を紡ぎだしていた。50年代に入ると語り手の眼差しは次第に登場人物や語り手自身の内面に向けられるようになり、「谁是放火者」及び「过时的爱情」においては登場人物の心理に焦点をあてた語りが目立つようになる。

「物語世界内の語り手」を用いた作品が３作連続した後、1958年５月に発表された「唉，这伙年轻人」[26]には再び「物語世界外の語り手」が登場する。本作においては語り手の内的焦点化の傾向は見いだせず、描写を排して物語の叙

述に専念する“山薬蛋派”独自のスタイルが復活している。

以後、発表された作品には全て「物語世界外の語り手」が用いられているが、この時期の語り手は物語世界の外から時には情景を眺めまた時には登場人物の心理に目を向けるようにもなり、40年代の禁欲的な語り口や50年代の内的焦点化の傾向を見出すことはできなくなる。

なお、こうした50年代における「物語世界外の語り手」の内的焦点化の傾向は、馬烽，西戎，胡正，孫謙にも共通して見出すことが出来る。

２．２　物語世界内の語り手

束為の作品において、「物語世界内の語り手」を採用している作品は28篇中８篇存在している。このタイプの語り手は概ね彼の創作歴の前期から中期にかけて集中的に登場しており、その在りようも時期によって変化がみられる。“山薬蛋派”の作風には馴染まないと言えるこの語りのスタイルはどのように束為の作品では用いられているのだろうか、本節ではその在りようの変遷を年代順に追っていく。

束為の作品において「物語世界内の語り手」が初めて登場したのは第３作「劳动英雄温象栓」においてである。本作は雑誌『人民時代』(1946年１巻９期）の“英雄紹介”というコーナーに掲載されており、温象栓という実在の農民が減租減息運動をきっかけに極貧生活から抜け出し、食糧増産に成果を上げて特等労働英雄として表彰されるまでを描いている。語り手「我们」は専ら主人公温象栓の事績を語る【「我们」が他者の物語を語る】タイプの語り手であり、その在りようは当時多く用いられていた「物語世界外の語り手」に近い。但し、題材が実在の人物の実際の事績であること、また語り手の“老温是新解放区新兴农民的典型人物！（温さんは新解放区における新興農民の典型的な人物だ！）”[27]と誇らしげに語る語り口から考えるに、本作の語り手は物語世界を語る、というよりもむしろ仲間の活躍を伝える通信員という存在に近い。

1948年７月、４作間に挟んで『晋綏日報』に発表された「第一次收获」では、語り手“老束”がかつて仕事をしていた何家荘を訪れ、嘗ては食うものにも困るほど貧しかった何来生一家が土地改革を経て見違えるほど良い生活を送っている姿を物語る。語り手は確かに作中に登場するものの、語られる内容はあくまで何来生一家の過去と現在であり、【語り手「我」(“老束”）が他者の物語を語る】タイプであると言える。

「卖鸡」を間に挟んで、引き続き『晋綏日報』(1948年９月27・28日）に掲載された「十年前后」は「第一次收获」とよく似た構造を持っており；仕事で山村に滞在した語り手「我」によって村の貧農趙満満が土地改革をきっかけに立ち直り、離散した妻子が戻ってくるまでの物語が語られている。本作も「第一次收获」同様【語り手「我」が他者の物語を語る】タイプであり、「物語世界外の語り手」にかなり近い語りのスタイルを持っていた。

解放後初めて発表された「春秋图」(1950年）にも【語り手「我」が他者の物語を語る】タイプの語り手が採用されており、自分の技術に自信を持つ王老人が先進的な農業技術を信用せずに不作を招いてしまい、自らの過ちを認めるまでが語られているのだが、些か複雑な語りの構造を持っている；

这套“春秋图”画的是“王老汉种谷的故事”。一个干部手里拿了根柳条子，指着“春秋图”往下讲解。可惜王老汉父女来的迟了些，这故事出在哪区哪村也不晓得，咱现在就按照人家讲的这个故事，重新编排一下，记在下边。至于王老汉二梅父女俩，且让他们看画听讲，以后再说。[28]

このように作中では王老人の失敗談が連環画に描かれ、それを幹部が解説しているところを王老人本人が見物しており、それを語り手「我」が改めて編集した、と語っている。つまり【語り手「我」が作中に語られる王老人の物語を再編して語る】スタイルであり、語り手は自ら物語を再編し、語る行為を読者に顕示している。

50年代半ばに入ると、「物語世界内の語り手」の使用頻度が上がり、在りよう自体にも変化が現れる。

1954年に発表された「缺粮户」は、語り手「我」が不当に救援食料を請求して転売しようとした人々を告発して不正を糾したなりゆきを聞き手である“老李同志”に語りかける物語であり、東為の作品において【「我」が「我」自身の物語を語る】タイプの語り手が初めて採用されている。

２作間に挟んで1957年に発表された「难忘的印象」には語り手として“老李”が登場する。本作では、「我」(＝“老李”）が任務を果たす道中知り合った友人劉正文との交友を回億しており、【「我」(＝“老李”）が「我」自身の物語を語る】スタイルとなっている。

続く「好人田木瓜」(1958年）においても「物語世界内の語り手」が採用されている。但し本作での語り手自身は物語には登場せず、気弱な主人公田木瓜が合作社の食糧の盗難を目撃し、犯人からの脅迫を退け勇気を奮って告発する

までの物語を語る言わば【「我」が他者の物語を語る】タイプの語り手である。

「好人田木瓜」の２か月後、『人民文学』３月号に発表された「老长工」（1958年）には語り手として“老李”が三度目の登場を果たす。本作では、任務のついでに農村に滞在した「我」（＝“老李”）が、農業社の問題社員を殴ったという幹部郭在先に出会い、彼の半生と暴行の理由を聞きだし、問題社員がトラブルを起こして処分を受けるまでを語っている。作品全体としては【「我」（“老李”）が他者の物語を語る】スタイルなのだが、作中に郭在先自身による語りが内包されているため、厳密には【「我」（“老李”）が伝聞した【「我」（郭）が語る「我」（郭）自身の物語】を語る】タイプであると考えなくてはならない。

以後、束為の作品から「物語世界内の語り手」は姿を消し、語り手は物語世界の外に立ち続ける。束為の作品における「物語世界内の語り手」の変化の軌跡を概観してみると；【「我」が他者の物語を語る】⇒【「我」が「我」自身の物語を語る】⇒【「我」が伝聞した【「我」が語る「我」自身の物語】を語る】となっており、デビュー直後の時期に【「我」が「我」自身の物語を語る】タイプの語り手を採用していた馬烽，西戎，胡正，孫謙ら“山薬蛋派”同世代の作家たちとはやや趣を異にしている。ただし、50年代中葉～後半にかけて「物語世界内の語り手」が多用され、また語りの構造が複雑化する傾向は他の作家たちにも共通して見出すことができる。

また、８篇中４篇に“老李”・“老束”といった作家本人を連想させる語り手が登場しているが、こうしたタイプの語り手は馬烽の作品にもしばしば登場している。

２．３　介入する語り手

ここまで束為の作品の語り手について、語り手の立ち位置（物語世界の内／外）を基準に分析を進め、その在りようの変遷について概観してきた。しかし、彼の作品に採用されている語り手について考えるとき、もう一つ検討を必要とする問題が残されている。

本章の冒頭でも指摘した通り、“山薬蛋派”の作品は「物語世界外の語り手」を採用したものが多くを占めている。一般に近代文学における「物語世界外の語り手」は読者にその存在を悟らせない言わば“透明な存在”としてそのリアリティを維持するものであり、前近代の章回小説の語り手のように講談師の存在を読者が意識するような語り口を採用することは多くない。しかし、従来の

論者の分析では趙樹理，馬烽，西戎，胡正，孫謙すべての作家の作品に「物語世界外の語り手」が物語言説の中に顔を出す現象が見出され、この「介入する語り手」とでも呼ぶべき存在は年代を追うごとに登場頻度が上がり、その介入の度合いも強まるという傾向がある[29]。

束為の作品においては28篇中26篇とほぼ全ての作品においてこの「介入する語り手」が登場しており、従来論者が分析の対象としてきた“山薬蛋派”の作家の中でも最多である。では束為の作品における「介入する語り手」はどのような形で物語に顔を出すのであろうか？

２．３．１　デビュー（1943年）から解放前（1949年）まで

【介入する語り手】

束為の作品においてはデビュー作「租佃之间」（1943年）から「介入する語り手」が登場しており、物語言説にその顔を覗かせて読者に向かって疑問を投げかけたり解説を加えたりしている；

数分钟前，他曾英勇地为他自己的生活的幻想战斗，现在呢？负伤的狼样地躺在阴暗的巢穴中。[30]

说起来，这也是一桩莫名其妙的事，前堡子后堡子本来是叫堡子村，不分前后的，谁也不知道从什么时候开始把南半个村叫前堡子，而北半个村叫后堡子的。[31]（下線は論者による）

また、「老婆嘴退租」（1946年）においては「語り手」としての自らの語る行為に訂正を加えてもいる。

这个老婆嘴到了减租大会上，可就不同了，吹胡子睁眼（说错了，他没胡子），那副铁嘴钢舌丁丁当当响了一阵，到后来，说不过佃户，松下了。[32]

（下線は論者による）

このように、1949年以前に発表された10作品のうち、「十年前后」（1948年）を除くほぼ全ての作品において「介入する語り手」が登場している（「別表」参照）。この時期の「介入する語り手」は作中に時折顔をのぞかせる程度であり、作品のリアリティが脅かされることもない。しかし50年代に入って「介入する語り手」の在りようが大きく変化しはじめる。

２．３．２　解放（1949年）以後

【物語をコントロールする語り手】【論評する語り手】【感情移入する語り手】

1949年以後の束為の作品では、「难忘的印象」（1957年）を除く18篇中17篇に「介入する語り手」が採用されており、より積極的に物語をコントロールしたり、登場人物に肩入れしたりしはじめる。まずは「春秋图」（1950年）の語り手に注目してみよう；

这套“春秋图”画的是“王老汉种谷的故事”。一个干部手里拿了根柳条子，指着“春秋图”往下讲解。可惜王老汉父女来的迟了些，这故事出在哪区哪村也不晓得，咱现在就按照人家讲的这个故事，重新编排一下，记在下边。至于王老汉二梅父女俩，且让他们看画听讲，以后再说。[33]

王老汉就是这一号子人。就因为他的脑筋不开，去年吃了个大亏，他老婆子和他美美地打了一仗，这是以后的事，等一会儿再说。[34]

王老汉种谷的故事，讲到这里就完了。（下線は論者による）[35]

このように物語のあちこちに出現し、あたかも講談師のように物語の始まりと経過、結末をコントロールしていることが分かる。こうした物語をコントロールするタイプの語り手は「好人田木瓜」（1958年）にも採用されている。

２．１でも触れたが、束為の作品における語り手は1950年代後半において大きな変化を見せており、こうした変化は「介入する語り手」にも見出すことができる。

50年代後半に発表された「过时的爱情」（1957年）は、幸せな結婚をしたはずのヒロイン白秀雲が、いつしか心変わりした夫の裏切りを受け、離婚して新たな人生の一歩を踏み出すまでを描いた作品である。この物語の末尾で物語世界の外部に立つ語り手は自らが語る物語中のキャラクターに対し論評を加えたりまた感情移入したりもする；

不知张群以后怎么生活？这种人是能够生活下去的。能够忘记过去的一切，寻找新的欢乐，而无丝毫的痛苦。然而，秀云的生活，虽然放下了千斤担，浑身轻松了，她的新生活仍然是痛苦的。她的痛苦是因为她不能忘记过去的一切啊！她也常常对自己说：算了吧！不要再想过去的事了，可是，由不得自己啊！也许有一天，秀云忘记了过去的一切，不再思想了，一定会快乐起来的。[36]

このように夫の張群に対しては“過去の全てを忘れ、新たな快楽を求めても何の痛みも苦しみもない”と批判し、ヒロインに対しては“いつの日か、秀雲は過去の全てを忘れて考えもしなくなり、きっと満ち足りるだろう”と肩入れして感情移入している。

このような登場人物に肩入れする【感情移入する語り手】や自らの見解を述べる【論評する語り手】は「唉，这伙年轻人」(1958年)，「临时任务」(1958年)，「多年的愿望」(1959年)[37]，「大事业」(1959年)[38]，「于得水的饭碗」(1959年)[39]，「迟收的庄禾」(1962年)[40]などにも見出すことができる。

このように、東為の作品には初期から「介入する語り手」が登場するが、40年代まではさほど物語言説に介入するわけではなかった。しかし、1950年代からはその介入の度合いを強め、【積極的に物語をコントロールする語り手】や登場人物に肩入れする【感情移入する語り手】，自らの見解を述べる【論評する語り手】が多用されるようになる。

こうした創作活動の後期に向けて「介入する語り手」の使用頻度や介入の程度が上昇する傾向は、“山薬蛋派”の他の作家にも共通して認められるものである。

２．４　まとめ

以上東為の作品における語り手について考察してきた、ここで改めてその変遷の跡を辿ってみたい；

1943年のデビュー作から「物語世界外の語り手」が採用され、40年代の作品はほぼ一貫して「物語世界外の語り手」が用いられた。解放前後に「物語内の語り手」が多用されるが、この時期採用されたのも【「我」が他者の物語を語る】タイプの語り手であり、その立ち位置は「物語世界外の語り手」に近い。

50年代半ばにおいて語り手の在りように変化が訪れる。1957年から1958年にかけて「物語世界内の語り手」が集中的に登場し、【「我」が「我」自身の物語を語る】タイプの語り手が採用され、また【「我」が伝聞した【「我」が語る「我」自身の物語】を語る】タイプのような複雑な語りの構造を持つ作品も登場する。さらにこの時期の「物語世界外の語り手」の眼差しは物語の叙述よりも登場人物の内面に注がれる内的焦点化の傾向が現れる。

1958年以後の作品には全て「物語世界外の語り手」が用いられるが、40年代の禁欲的な語り口や50年代後半の内的焦点化の傾向は見出すことができなくなる。

こうした東為の作品における語り手の変遷の軌跡は、出発点こそ異なるものの、50年代の「物語世界内の語り手」の登場や内的焦点化の傾向は他の“山薬蛋派”の作家にも認められる。

また、語り手が物語言説の中に自ら姿を顕わす「介入する語り手」は束為の作品においてはほぼすべての作品に登場し、“山薬蛋派”の中でも群を抜いて多い。しかし、年代を追うにつれて介入の頻度や程度が上昇する、という傾向は他の“山薬蛋派”の作家全てに認められるものであり、さらに50年代以後登場する【物語をコントロールする語り手】や【感情移入する語り手】,【論評する語り手】といったタイプの語り手も胡正，孫謙の作品にも存在している[41]。

最後に束為の作品においていち早く「物語世界外の語り手」が採用された理由についてすこし考えてみたい；

論者の考えではやはり創作活動の開始時期が影響しているように思われる。延安での学習経験を共有し、後に“山薬蛋派”を形成する馬烽，西戎，胡正，孫謙たちはみな1942年にデビュー作を執筆している。この時期、彼らは延安での学習期間中、あるいは120師団の戦闘劇社に配属された直後の時期であり、作風の転換のきっかけになったと思われる農村での工作経験が殆どない。そのため、馬烽たちは初めて筆を執ったとき、書くべき題材は自らの経験に頼るしかなく、「物語世界内の語り手」から出発せざるを得なかったのではあるまいか。一方束為は僅かではあるが創作活動の開始が遅く、1943年に農村に入って減租減息工作を経験してから創作を始めている。そのため彼には書く題材を広く目の前に広がる農村に求めることができたと考えられる。

３．描写／叙述

前章では、束為の作品に採用されている語り手について分析し、その語りのスタイルの変遷の軌跡を概観した。その結果、初期作品においては束為の独自性が存在し、50年代以降の作品においては“山薬蛋派”の他の作家との共通点が多いことを指摘した。本章では語り手がどのような密度で物語世界を語っているのか、すなわち叙法の問題について考察していく。

まずこの問題については、従来の研究によって“山薬蛋派”の作品には；【描写を極力排して物語の叙述を優先する】という叙法上の特徴があると指摘されてきた[42]。但し近年論者が分析したところによれば、どの作家にも確かにそうした“山薬蛋派”独自の叙法を採用している時期は存在するものの、その前後に世界を彩り豊かに描き、登場人物の心理を細やかに描く時期もまた存在している[43]。ではこうした叙法上の変化の軌跡は束為の作品においても見出しうるのであろうか？

３．１　描写を交えた叙述から叙述優位へ

まずは1943年に発表されたデビュー作「租佃之间」と第２作「谈判」から見ていこう、この2作品には全知の視点から描かれた比較的詳細な人物描写，心理描写，情景描写が用いられている；

二小子有着一副忠厚朴实的脸相。一生的勤劳在那深而紊乱的皱纹里可以寻得出来，眼窝深陷的怕人，黑红的脸上像涂了层猪油，亮锃锃的；在那油层底下有几颗麻子散布着，那几颗麻子表示了他绝对的忠诚与安分，而没有一点奸诈，狡黠的影子。[44]

对于人活一辈子到底应该受多少苦，而这些苦楚又是不是老天爷规定的，他有些惶恐。“买卖人指望多卖些货，做官的指望升一升，老和尚盼着施主去烧香，庄户人家呢，没了地，就甚也没了。政府叫减租子，地掌柜就退地，不能！”二小子想：“一家三口子就指望着它。”[45]

下了半夜的小雨，空气非常新鲜，柔软的春风摸着他的脸，太阳发着温暖的光。走进沟里，澄清的流水，洁净的石头，他蹲在水边，洗了手脸，两只湿淋淋的手在皮袄上抹了几下，迈过小河，便向着前堡子走去。[46]（以上「租佃之间」）

在马寡妇认为，别说五块钱，就是一块，或一角，在这样苦寒的春天，王廷邦都是掏不出来的；那么，转租给别人，就不能说她是不讲人情的。[47]

他思想着，把头搭在右肩上，松弛的眼皮蒙上眼珠。烟袋从丛生的胡子里伸出来，右手托住烟锅，眉头向前照着。像中国壁画上的老寿星。他的脸看起来，像是生长在胡子里，而不是胡子生长在脸上的一样。[48]（以上「谈判」）

これらの描写を見ると、この時期の作品には人物を描く際に皮膚の質感やあばたまで描く緻密で写実的なタッチが用いられており、また情感豊かに情景が描かれてもいることに気付かされる。

続いて1946年『人民時代』誌上に発表された５作；「劳动英雄温象栓」（叙述優先），「放羊娃李三孩」（心理１情景１），「土地和它的主人」（心理２），「老婆嘴退租」（叙述優先），「红契」（心理１）からはこうした写実的な人物描写や情感豊かな情景描写は姿を消し、【描写を極力排して叙述を優先する】スタイルを採用したものか、あるいはシンプルな心理描写がわずかに見出せるのみである。以後40年代終わりにかけて基本的には物語の叙述が優先されるようになる（「別表」参照）。

こうした【写実的な描写を交えた叙述】から【描写を極力排した叙述スタイ

ル】への転換は、馬烽，西戎，胡正，孫謙らにも見出すことが出来る。

３．２　叙述優位から描写の復活へ

40年代後半に一旦定着したかに見えた【描写を極力排した叙述スタイル】は、解放後早くも揺らぎ始める。1950年、解放後初めて発表された「春秋图」には、主人公王老人が自らの農業技術に対する誇りから新技術を信用できず戸惑う心理が細やかに描かれている；

王老汉往回走的时候，一路盘算：共产党什么都好，都能行，可是说到种庄禾，他们都不“在行”，咱是捣土圪垯出身，祖辈就没传下这种办法。小山狗崽子，懂得个甚，论工作，他还能说到点子上，说到种地，叫他捣上几年土圪垯再说吧！唉！今年不浸种怕不行，浸种吧！又怕种上出不来，出来又怕生“乌霉”，落个空。[49]

王老汉听说叫浸谷籽，心里真麻烦透了。据他估计，谷籽在两开一冷的水里一浸，就怕浸死了。就算浸不死，出来一定要生“乌霉”。这是千万使不得的。王老汉睡下想道：这世道不知道要怎变呀！去年秋天没有秋翻地，受了干部的批评。现在如果不浸种，说不定王在山要在戏台子上批评他哩！[50]

こうした登場人物の内面を細やかに描くスタイルは、続く「初升的太阳」(1954年）においても見出すことができる。

前章において分析したように、束為の作品の語り手は1950年代後半に大きな転換点を迎えており、そうした語り手の在りようの変化は叙法にも影響を及ぼしている。1955年に発表され、麦の収穫場への放火事件の発生から解決までを描いた「谁是放火者」(1955年）では、冒頭に事件の舞台となる収穫場の夕暮れが描かれている；

太阳早已落到西山背后，紫红色的晚霞也消散了。黑夜悄悄地来到太行山的脚下。张家湾打麦场上扇车的“隆隆”声和人们的歌唱声也安静下来，小雀子也在树上睡着了。悠悠的南风吹来阵阵麦香，白天的燥热没有了，凉爽下来了。人们都睡了，安安静静地睡着了。[51]

このように「租佃之间」以来姿を消していた情感豊かな情景描写が再び作品世界を彩るようになり、以後もこうした情景描写は「老长工」(1958年）や「临时任务」(1958年)，そして「迟收的庄禾」(1962年)，「玉成老汉」(1962年)，「清风习习」(1982年）といった晩期の作品においても目にすることができる。

続く「过时的爱情」(1957年）ではヒロインを嫁に出すことに迷いを隠せな

い両親の心理や、夫の心変わりを疑うヒロインの心理がこと細やかにかなりの分量を割いて描写されるようになる。また「好人田木瓜」(1958年) では写実的な人物描写も復活し、同時に告発を迷う田木瓜老人の心理も細やかに描かれるなどこの時期の作品の叙法は“山薬蛋派”の【描写を極力排した叙述スタイル】から最もかけ離れたものとなっている；

可是，老两口却有自己的事。一切都很满意。自己的闺女十七大八，长大成人了。要人样，有人样，要伶俐有伶俐。俗话说，女大是人家的人，早晚也是要出嫁的。张群那后生，更是没话可说。无论说到哪里都比自己的闺女要强。论人才，端端正正。论地位，县上的秘书，年纪才二十五岁，也相当。至于为人，去冬土地改革的时候，在村里工作了一冬天，又正直，有公道。村里哪个人不说个好字。有了空，不是看书就是写字。写写算算更是不用说了。对于穷苦人，就像对待自己的亲人一样，恨不得一下子帮助穷人翻过身来，再不受地主的压迫，有吃穿过好光景。如果硬要找他的缺点，从来不发脾气也许算是缺点，因为不发脾气的青年人实在是不多啊！这样一个年轻人爱了自己的闺女，真是百里挑一，很不容易啊！错过机会，要后悔的，村里有好几个姑娘正在追张群呢！可是，张群除了对白秀云好以外，决不和别的姑娘来往。顶多也不过在她们面前说几句笑话。老两口盘算来盘算去，这桩婚事，真像是天配姻缘，在好不过了。[52] (「过时的爱情」)

木瓜大叔长一副南瓜脸，满面皱纹，短粗身材，腰间经常结一条粗布腰带。头上裹一块毛巾。这几年，粗布腰带换了一条皮带，裹头的毛巾换成一顶干部帽了。这顶干部帽是一个下乡的干部给他的，有时戴在头上，有时掖在腰间，天热了，还要当扇子使唤，年长日久，也不洗刷，帽沿和帽圈渗透了脑油，还粘了些黄土。说这不大卫生，也许不错吧，可是，这顶破油腻帽和那满脸的皱纹，花白的圈脸胡子，一双长眉毛下的衰老的眼睛，整个配搭起来，越发显出一副好人相，越看越像是木瓜大叔了。[53] (「好人田木瓜」)

「唉，这伙年轻人」(1958年) では再び叙述優位の叙法が採用されているが定着することはなく、続く「临时任务」では冒頭に情景描写が見出され、「多年的愿望」(1959年) では主人公白三海老人が何故水利工事に参加しないか、が謎のひとつになってもいるため、彼の細やかな心理が描かれるなど、【物語世界を豊かに彩りながら語るスタイル】の作品が後に続く。

これ以後晩期にかけて“山薬蛋派”的な叙法に近い【シンプルな描写を叙述に交えて語るスタイル】を採用する作品 (「拐先生李步高」(1959年),「权力下

放」(1959年),「大事业」(1959年) など) と50年代後半に登場した【物語世界を豊かに彩りながら語るスタイル】を採用する作品 (「于得水的饭碗」(1959年),「迟收的庄禾」(1962年),「玉成老汉」(1962年),「清风习习」(1982年)) が併存することとなる。

以上、束為の作品における叙法の問題について分析してきた、ここで改めてその変遷の流れをおさらいしておきたい。

まずデビュー当初においては写実的な人物描写や抒情的な情景描写を伴う【描写を交えて叙述する】叙法が採用されていたが、40年代半ばになって“山薬蛋派”の特徴である【描写を極力排した叙述スタイル】へと転換する。

1950年代に入ると再び細やかな心理描写や写実的な人物描写、抒情的な情景描写が作中に多く表れ、とりわけ50年代後半においては“山薬蛋派”的な叙法からはかけ離れた【描写を多用するスタイル】が登場する。以後晩期にかけて“山薬蛋派”的な叙法に近い【シンプルな描写を交えて叙述するスタイル】と【物語世界を豊かに彩りながら語るスタイル】が併用され続けた。

このように、束為の創作歴において“山薬蛋派”的な物語の叙述優先の叙法を採用していた期間は比較的短く、1950年代には早くも描写優位の傾向が表れている。但しこうした傾向は胡正の作品にも存在しており[54]、また【描写優位⇒叙述優位⇒描写優位】という変化の軌跡そのものは“山薬蛋派”の作家たち全てに共通することも明らかとなった。

４．順序

本稿では、ここまで束為の作品の語り手とその語り口 (＝叙法) に注目して分析してきた。その結果、基本的には“山薬蛋派”としての変化の軌跡を共有していながらも、同時に束為の独自性と言いうる部分も存在することが明らかになった。

本章では、語られる物語そのものを対象に、どのような物語がどういった順序で語られているのか、考察していきたい。

一般に近代文学の作品において、物語世界の内部で流れている時間の順序や密度と実際に読者が目にする順序及び密度が完全に一致することはまずありえない[55]。しかし“山薬蛋派”の作品、とりわけ趙樹理の作品においては直線的に展開するクロノス的な時間構造をもつものが多く、また農村に発生した問題とその大団円的な解決がセットになっている。

こうした【物語の設定から問題の発生⇒解決へと直線的に展開するクロノス的な時間構造】は“山薬蛋派”の特徴のひとつとして指摘されてもいるのだが[56]、論者の分析によれば、そうした特徴にも各作家の【初期における獲得】と【後期から晩期にかけての変質と喪失】という変遷の過程が存在している。[57]

東為の作品においてもそうした変遷の軌跡を見出すことはできるのであろうか？

４．１ 【問題⇒解決】構造とクロノス的時間構造の獲得

まずはデビュー作「租佃之间」（1943年）の物語から分析してみよう；

① ある朝、二小子は六十八の家に小作地を横取りするなと怒鳴り込み、地主が決めたことだと言い張る六十八と取っ組み合いになる。家に戻った二小子は耕す土地がない恐怖に襲われる；

② ８年前、借金に苦しんで土地を失った二小子は、以後糞拾いや地主金卯の雇人などをして苦労していた。

③ 二小子は金卯のところに行き、小作を続けさせてほしいと懇願するが、金卯は養ってやった恩も忘れて減祖運動をやるなら土地は貸さないと言い張る。

④ 確かに金卯は行き場のない二小子を引き取って雇人として面倒を見ていた、二小子は雇人としての稼ぎで家と土地、妻を手にしたのだった。

⑤ そこへ六十八がやってきて金卯の土地は必要ないと言い放ち、その場を立ち去る。後を追った二小子に向かって農民会の秘書が呼んでいる、と告げる。

⑥ 夜、群衆大会が開かれ、金卯が小作料引き下げの布告を守らず、二小子から土地を奪おうとした案件が議題となった。二小子は壇上に立って自身の過去を話すうち、日本との戦闘の話になる；

⑦ 雪の中八路軍は日本軍と戦い、村人も支援に当たったが、二小子は空腹のあまり失敗を犯して兵士を死なせてしまう。その時金卯は米一粒供出しなかった。

⑧ 号泣して話ができなくなった二小子に代わって金卯が発言を求められる。金卯は自分の土地を売るのは自由だ、と弁解するが、六十八に貸して従来通りの年貢を取り立てようとしていた事実を指摘され、皆の非難を浴びる。結果土地は契約通り二小子に小作させること、取り立てすぎた年貢は返還することが決定された。

このように、小作人二小子と六十八が地主金卯の悪巧み（[問題]）を見破って小作料を下げさせる（[解決]）までを描いた短篇であり、デビュー作の段階で早くも【問題⇒解決】構造が存在する。しかし過去の回想が幾度も挿入されるなど、時間の錯綜が認められ、また前章でも触れたように本作には写実的な人物描写や情感豊かな情景描写が多用されており、“山薬蛋派”的な作風からかけ離れた部分も存在する。第２作「谈判」（1943年）も「租佃之间」同様、【問題⇒解決】構造は存在するが、地主との対決のワンシーンを切り取ったような時間構造や描写を多用した叙法を採用している。こうしたことから判断するに、束為のデビュー当時の作品においては、“山薬蛋派”的な作風はまだ完全には形成されていなかったと言うことができる。

続いて1946年、雑誌『人民時代』に集中的に発表された作品群に目を向けてみよう。第３作「劳动英雄温象栓」では、主人公温象栓が極貧の生活から立ち直り、労働英雄になるまでの過程を叙述優位の語り口を用い、クロノス的な時間構造を通じて語っているが、【問題⇒解決】構造を見出すことはできない。続く第４作「放羊娃李三孩」においても【物語世界外の語り手】・【叙述優位の叙法】・【直線的な時間構造】といった要素を見出すことができるが、【問題⇒解決】構造は明確ではない。

束為にとって初めて“山薬蛋派”的な作風が確立されたと言えるのは第５作目となる「土地和它的主人」においてである。以下にその物語構造を見てみよう；

① 王海生は実直な農民で農作業の腕も確かだったが[設定]、収穫を全て地主にもっていかれるため、いつも貧乏だった。[問題]

② 十数年前の冬、地主の周に未払いの小作料を盾に土地の引き渡しを請求される。仕方なく王海生は土地を担保に差し出して周の小作になり、収穫のほとんどを奪われる日々が始まったのだった。[問題の背景]

③ 共産党政府が減租の布告を出すと、王海生は農民会に参加し、積極的に周囲を説得して大会を開催し、地主の周と対決する。周は皆の勢いを恐れ、小作料の返還に応じた。変工組ができてからは水路も整備され、王海生の農地も見違えてよくなった[問題の解決Ⅰ]。

④ 正月15日、王海生は３人の客を家に迎えた。農会組長の王元、となりの馬久徳、そして地主の周である、この日、海生は地主の周から土地を買い戻す話し合いをすることになっていた。しかし地主の周は買い戻しの値段に納得

せず、他の土地を売ろうとするが、海生は父から受け継いだ５垧の土地以外は欲しくないと突っぱねる。10年来年貢を出し続け、もう十分ではないか、と海生に言われ、ついに周地主は売ることに同意する。契約書を書き、押印も済ませ、ついに売買契約が成った。うれしさのあまり海生は酒を飲みすぎ、一日中寝てしまう。［問題の解決Ⅱ］

このように、冒頭において主人公の［設定］と抱えている［問題］，そして［問題］の背景を提示し（①・②）、共産党の指導の下、地主との闘争を経て問題を［解決］する（③・④）物語構造となっており、本作において初めて【物語世界外の語り手】・【叙述優位の叙法】・【直線的な時間軸を通じて【問題⇒解決】構造を展開する物語】といった“山薬蛋派”の特徴を全て見出すことができる。

続く「老婆嘴退租」，「红契」においてもこうしたスタイルを見出すことが出来るが、この後、1948年に『晋綏日報』紙上に発表された３作品においてやや変質した姿を見せるようになる。

「第一次收获」は、「物語世界内の語り手」である「我」（“老束”）が旧知の何来生一家を訪れ、その暮らしぶりの変貌を過去と現在を比較しつつ読者に伝える作品であり、【問題⇒解決】構造は存在するのだが、その過程はほぼ描かれず“山薬蛋派”的な作風はやや影を潜める。また「卖鸡」においても、周囲の反対を退けた若いカップルが市場で結婚を決めるシーンに重点が置かれており、“周囲の反対”という問題を如何に解決したか、という【問題⇒解決】の過程はわずかに触れられるのみとなっている。「十年前后」においては、地主の搾取のため家族離散まで経験した趙満満が土地改革を経て生まれ変わり、妻子を取り戻すまでの物語が観察者である「我」の目を通じて語られている、本作においては“主人公の生まれ変わりと家族の再会”という【問題⇒解決】構造を見出すことが出来るが、【物語世界内の語り手の採用】・【錯綜した時間軸】といった“山薬蛋派”のスタイルからはややかけ離れた部分も存在している。

このように、デビュー直後からある程度備わっていた“山薬蛋派”的な物語構造は、1946年「土地和它的主人」においてほぼ確立されるが、解放前の時期には再び揺らぎを見せていることが分かる。

４．２　物語構造の変質⇒喪失と復活

続いて解放後に発表された束為の作品の物語構造を分析していきたい。まず「春秋图」（1950）には、物語世界の中で講談師が語る物語を語り手「我」が再

編して語る、というやや複雑な語りの構造が存在しており、また詳細な心理描写も多用されるなど、“山薬蛋派”としての作風からずれた部分が多く見出せる。しかし、語られている物語【自分の農作技術に自信を持つ王老人が先進的な農業技術を信用せずに不作を招いてしまい、自らの過ちを認める】自体は直線的かつ【設定⇒問題⇒解決】構造を持つものであった。続く「初升的太阳」(1954年),「却粮户」(1955年）も、心理描写や情景描写を用いて物語世界を彩る語り口を採用しているものの、物語自体は設定から問題の発生とその解決に至る過程が直線的な時間軸を通じて語られている。

前章までの分析で明らかなように、束為の作品には、語り手・叙法いずれの角度から分析しても1950年代後半に大きな転換点が存在していた、そしてそれは語られる物語においても例外ではない。

「谁是放火者」(1955年）は現状に不満を持つ元地主による放火事件を描いた作品であり、【犯行現場となる麦の収穫場の描写⇒張大有による犯行⇒犯行に至る動機⇒謎解き⇒解決】という物語構造を持っている。本作には【問題⇒解決】構造自体は確かに存在しているのだが、情景描写から始まる語り口や、解決部分の不明瞭さ（犯人張大有を問い詰めるところで物語が終わる）のため、“山薬蛋派”的な物語からはやや距離があるように感じる。

続いて「过时的爱情」(1957年）の物語に注目してみたい；

① 白秀雲は県の幹部という周囲がうらやむ相手と結婚した。

② 彼女は幼少期、貧しくて学校にも行けなかったが、共産党政のおかげ小学校に通えるようになった。卒業後、県から派遣されていた幹部張群に見初められて結婚することになる。

③ 秀雲は結婚後も中学、高校と進学を希望し、張群もそれを応援するなど、仲睦まじい。秀雲の両親は、一人娘の結婚相手が張群であることに満足していたが、地元の人間ではないため転勤があれば将来面倒が見てもらえないと不安に思っていた。

④ 彼らは夏休みに結婚した。秀雲はよく勉強し、日々が充実している秀雲は以前にもまして美しくなった。そこへ張群の新解放区への転出の命令がでる。両親は二人を手厚くもてなし、見送ってやった。

⑤ 生活のため、秀雲は進学をあきらめ、タイピストの仕事につく。町に移って２人の子供に恵まれた。張群は子供をかわいがり、夫婦はいつも一緒、周囲がうらやむほどであった。

⑥　しかし次第に二人の生活に変化が現れる。夫が単身宿舎に泊まって家に帰る機会が減り、女性の写真や手紙の存在などから秀雲の胸中に疑いが生まれた。さらに張群の子供たちへの態度も冷たくなっていく。［問題］
⑦　三人目も生まれようかというとき、張群は冷淡に何もしようとせず、腹を立てた宿舎の管理人王老人が秀雲を病院に連れて行く。男の子が無事生まれたが張群は病室に入ろうともしない。
⑧　母親がやってきて心配し、秀雲に夫との関係を問い詰めたが秀雲は頑として口を割らない。疲れ果て、身の回りにも気を使えない娘を見て母親は何も言えず、中秋節に故郷にもどった。
⑨　秀雲は母親を見送ってから小群も保育園にあずけ、生まれたばかりの子には乳母を雇い、仕事に没頭した。そこへ王老人から子供が高熱を出した、と知らせがある。慌てての張群のもとに行くが、彼は若い娘と一緒におり、子供の病院に行こうともしない。
⑩　すべてを母親に話し、秀雲は張群と離婚した。張群のような人間は簡単に過去の全てを忘れあらたな享楽を求める。しかし秀雲は過去の苦しみにとらわれる、しかし自らに、いつかすべてを忘れ、楽しい日々がまたやってくる、と言い聞かせる。［破綻］

このように、物語の時間構造はほぼ直線的と言っていい、しかしこの作品に存在するのは【問題⇒解決】構造ではなく、幸せな結婚をしたはずの張群と白秀雲夫妻のすれ違い⇒夫の裏切り⇒離婚という【問題⇒破綻】の物語である。作中に挿入される詳細な心理描写もあいまって、本作からは“山薬蛋派”的な物語を見出すことはできない。続く「难忘的印象」（1957年）にも【問題⇒解決】構造は見いだせず、1957年の時点において“山薬蛋派”的な物語構造が一旦姿を消すことになる。

しかし、翌年発表された「好人田木瓜」（1958年）では、気弱な主人公田木瓜が合作社の食糧の盗難を目撃し、犯人からの脅迫を退け勇気を奮って告発するまでの物語が【「我」が他者の物語を語る】タイプの語り手によって直線的な時間構造（物語自体が回想ではあるが）を通じて語られており、再び“山薬蛋派”的な物語に接近する。続く「老长工」（1958年）においては、「我」（老李）が目撃した【社員を殴った郭在先が批判される⇒郭の正当性が証明される】（１章・３章）という【問題⇒解決】構造の物語の中に、郭在先自身による【「我」がなぜ社員を殴ったか】という“謎解きの物語”（２章）が内包されており、

やや変質してはいるが、ここにも“山薬蛋派”的な物語構造への接近を確認することができる。

さらに「唉，这伙年轻人」(1958年）において【物語世界外の語り手】・【叙述優先の叙法】・【物語の設定から問題の発生⇒解決へと直線的に展開するクロノス的な時間構造】といった特徴が出揃い、束為の作品において“山薬蛋派”の作風が復活することとなる。以後、束為の作品においては「临时任务」(1958年),「多年的愿望」(1959年),「大事业」(1959年),「于得水的饭碗」(1959年）といった比較的単純な時間構造と【問題⇒解決】構造を持つ作品が多くを占め、“山薬蛋派”的な作風が維持されていく。

ここでひとつ注意しておきたいのは、束為が1962年8月に大連で開かれた農村題材創作座談会において、これらの作品を執筆した当時進行していた大躍進[58]時代を“那时是吃了兴奋剂，现在吃了副泄药，浮热下去了，真正的热情还没有起来。”とかなり批判的に振り返っていることである[59]。“当時は興奮剤を飲んでおり、今や下剤を飲んで熱は下がったが本当の情熱はまだ湧き上がっていない”という批判の言葉は、急進的な政策により困窮する農村の現状を知りつつ、一方で文芸界の指導者として作品を世に送り出す当時の自身の創作にも向けられているのだろうか。

この大連会議は後に批判を受け、束為の上の発言も数年後始まる文化大革命期には批判を受ける材料になってしまう。こうした状況下に執筆された晩期の作品「迟收的庄禾」(1962年),「玉成老汉」(1962年),「清风习习」(1982年）からは次第に“山薬蛋派”的な物語が姿を消していく。

５．結論

以上、束為の作品を対象として語り手・叙法・順序の各視点から分析を進めてきた。ここで改めてその変遷の軌跡をたどってみたい；

1943年にデビューした束為の作品には、【物語世界外の語り手】・【問題⇒解決】構造といった特徴を見出すことができ、延安での学習経験を共有する馬烽，西戎，胡正，孫謙よりも一足早く“山薬蛋派”としてのスタイルが備わりつつあった。

1946年、雑誌『人民時代』に発表した作品群において【描写を極力排した叙法】・【直線的な時間軸】といった特徴も備わり、“山薬蛋派”としての作風を確立する。しかし40年代終わりから50年代初めにかけての作品には【「物語世

界内の語り手」の採用】・【初期作品のような描写の復活】といった“山薬蛋派”のスタイルからやや離れる傾向が存在する。

続く50年代後半の作品においては【「物語世界内の語り手」の多用】・【【問題⇒解決】構造の喪失】・【描写の多用】という特徴が見出され、“山薬蛋派”的なスタイルは一旦姿を消す。

50年代終わりには再び“山薬蛋派”的な特徴を備えた作品が多くを占めるが、60年代からの晩期においては再びそうしたスタイルは姿を消す。

こうした“山薬蛋派”的スタイルの獲得⇒変質⇒喪失の軌跡は他の“山薬蛋派”の作家たち、とりわけ馬烽，西戎，胡正，孫謙といった同世代の作家群の作品において見出すことができる。今後は“山薬蛋派”的スタイルの【獲得】と【喪失】二つの転機に焦点を絞り、そうした変化を生み出したものが何であったか追及していきたい。

注

1 本稿において使用する中国語の簡体字・繁体字は、引用部分を除いてできる限り日本語の新字体で表記することとする。
2「作家簡歴」(『束為文集』山西人民出版社（以下『文集』）2004年）及び「从战士到作家-李束为的生平与创作」（楊品『新文学史料』1996年第３号）を参考にした。
3『文芸報』1958年第11期。
4『文芸報』1965年第１期。
5『晋陽文芸』1983年７月号、本稿においては『五人集』（北岳文芸出版社1992年）所載のものを参照した。
6『山西大学学報』1984年第４期、本稿においては『五人集』（北岳文芸出版社1992年）所載のものを参照した。
7『新文学史料』1996年第３号。
8 拙稿「趙樹理文学における故事性」(『島大言語文化』13号2002年),「趙樹理文学の変容」(『島大言語文化』15号2003年),「馬烽文学における語り」(『島大言語文化』20号2006年),「西戎文学における物語構造」(『島大言語文化』24号2008年),「胡正文学における物語」(『島大言語文化』26号2009年３月),「孫謙文学における語り」(『島大言語文化』30号2011年３月）を参照されたい。
9「趙樹理文学の変容」(『島大言語文化』15号2003年）を参照されたい。
10「馬烽文学における語り」(『島大言語文化』20号2006年),「西戎文学における物語構造」(『島大言語文化』24号2008年）を参照されたい。
11「胡正文学における物語」(『島大言語文化』26号2009年3月),「孫謙文学における語り」(『島大言語文化』30号2011年３月）を参照されたい。
12「初生児」『文集』２巻。
13『抗戦日報』1943年９月１日。

14「生活之常青樹」(『五人集』北岳文芸出版社1992年所載),「民間故事的搜集和整理」(『文芸報』1949年７月14日、本稿では『文集』３巻所載のものを参照した)。
15『文集』には執筆・発表時期・掲載誌の情報がない。論者の調査では、1946年４月１日発行の『人民時代』１巻７期に掲載されていることが分かった。
16『五人集』「束为作品研究资料索引」には『人民時代』1946年２巻４期とあるが、論者の調査に拠れば、実際には１巻９期に「拦羊娃」という題名で掲載されている。
17 注８に同じ。
18『山西文芸月刊』創刊号。
19『山西日報』1954年９月20日。
20『山西文芸月刊』1955年７月号。
21『山西文芸月刊』1955年９月号。
22『火花』1957年２月号。
23『火花』1957年７月号。
24『火花』1958年１月号。
25『人民文学』1958年３月号。
26『火花』1958年５月号。
27『文集』１巻 p 395。
28 同上 p 157。
29 注８に同じ。
30『文集』１巻 p 68。
31 同上 p 71。
32 同上 p 100。
33 注28に同じ。
34『文集』１巻 p 158。
35 同上 p 169。
36 同上 p 199。
37『火花』1959年４月号。
38『人民文学』1959年10月号。
39『火花』1959年12月号。
40『火花』1962年11月号。
41 注８に同じ。
42「論“山薬蛋派”」(高捷『山西大学学報』1984年第３期),「略談“山薬蛋派”的理論主張和創作実践」－与戴光宗同志商確(程継田『山西文学』1982年11期),「“山薬蛋派”小説創作的“戯劇化”傾向」(朱暁進『南京師範大学報』(社会科学版)1995年第１期)ほか。
43 注８に同じ。
44『文集』１巻 p 69。
45 同上 p 70。
46 同上 p 82。
47 同上 p 87。
48 同上。
49 同上 p 159。

50 同上 p 160。
51 同上 p 396。
52 同上 p 182。
53 同上 p 211。
54 拙稿「胡正文学における物語」(『島大言語文化』26号2009年３月）を参照頂きたい。
55『物語のディスクール』(ジュラール　ジュネット　水声社1985年)
56 注42に同じ。
57 注８に同じ。
58 1958年から60年にかけて進められた急進的な社会主義建設運動、農村においては過度の集団化とノルマによって甚大な被害を招いた。
59『山西作家群評伝』1990年作家出版社。

＊本稿は平成23年度（2011年）科学研究費補助金（課題番号2272014100）による研究成果の一部である。

作品名	語り手	描写・叙述	時間構造	物語	掲載雑誌・紙
租佃之间	物語世界外の語り手、「介入する」タイプの語り手	人物３心理４情景２	各所に過去の回想が挿入された錯綜した時間軸	小作人二小子と六十四が地主の金卯の悪巧みを見破り、小作料の引き下げを認めさせるまでを描く、【問題⇒解決】構造あり	1943年 ８月３日・４日 『解放日報』
谈判	物語世界外の語り手、「介入する」タイプの語り手	心理３情景１人物１	ワンシーンを切り取っている	王廷邦と３人の小作人たちが土地を取り上げようとする地主と談判し、譲歩を勝ち取るまでを描く、【問題⇒解決】構造あり	1943年９月１日 『抗戦日報』
劳动英雄温象栓	物語世界内の語り手、【「我们」が他者の物語を語る】タイプ	叙述優先	過去の回想が中心となる	晋綏区の労働英雄温象栓が、民国初めの極貧生活から減租減息運動をきっかけに生まれ変わり、労働英雄になるまでを語る、【問題⇒解決】構造は存在せず、実在の人物を扱っていることもあり、むしろ通訊として扱うべきかもしれない	1946年４月１日 『人民時代』 １巻７期
放羊娃李三孩	物語世界外の語り手、「介入する」タイプの語り手	心理３情景１	クロノス的な時間構造	羊飼いの少年李三孩が両親の仇を取るために民兵隊への入隊を熱望し、実際に功績を上げて入隊を認められるまでを描く、【問題⇒解決】構造存在せず	1946年５月１日 『人民時代』 １巻９期

土地和它的主人	物語世界外の語り手、「介入する」タイプの語り手	心理２叙述優先へ。	冒頭の設定⇒問題の所在⇒解決への道筋⇒解決というクロノス的時間構造	父から受け継いだ土地を地主に奪われた農民が、共産党政府の指導の下、減租運動に取り組み、ついには土地を買い戻すことに成功するまでを語る、【設定⇒問題⇒解決】構造あり	1946年７月１日『人民時代』２巻１期
老婆嘴退租	物語世界外の語り手、「介入する」タイプの語り手	叙述優先	トラブル発生⇒実はこうだったと種明かしのための時間の錯綜が存在する	減租大会で年貢を返すことを約束させられた地主が、穀物を隠そうとして皆に見破られる、【設定⇒問題⇒解決】構造が存在する	1946年７月15日『人民時代』２巻２期
红契	物語世界外の語り手、わずかではあるが語り手の介入が見いだせる	心理描写１、基本的に叙述優先	基本的に前提⇒問題⇒解決という直線的時間構造	減租後も小作料を脅し取っていた地主を農民が力を合わせて追いつめ、土地を取り戻すまでを描く、【問題⇒解決】構造が存在する	1946年８月１日『人民時代』２巻３期
第一次收获	物語世界内の語り手「我」（老束）が他者の物語を語る	人物描写１・心理描写１	過去の回想が随所に挿入される	土地改革をきっかけに生まれ変わった何来生一家の様子を「私」の目を通して描く、【問題⇒解決】構造あり	1948年７月22日『晋綏日報』
卖鸡	物語世界外の語り手、「介入する」タイプの語り手	心理描写４、ただし短く基本的に叙述優先	市で若い二人が結婚を決める場面の中にこれまでのなれ初めが挿入される素朴な時間構造	【問題⇒解決】構造は背景にしりぞき、二人の恋人の逢瀬が前景に描かれる。	1948年９月16日『晋綏日報』

作品名	語り手	描写・叙述	時間構造	物語	掲載雑誌・紙
十年前后	物語世界内の語り手「我」が他者の物語を語る	心理描写３	過去の回想が中心となっている	貧しい農民趙満満は、土地改革をきっかけに生まれ変わり、妻子も取り戻すことができた、【問題⇒解決】構造あり	1948年 ９月27日・28日 『晋綏日報』
春秋图	物語世界内の語り手「我」が連環画の解説員の語りを再編して物語る	心理描写４、比較的長い描写が目立つ	１章、３章が生産展覧会のシーン、２章は王老人の物語が語り手によって編集されたうえで回想される、メタ物語である王老人の話は直線的な時間軸となっている	３章構造、自身の農業技術に自信を持つ王老人が、先進技術を信用せずに失敗し、自らの過ちを認める物語、【設定⇒問題⇒解決】構造あり	1950年 『山西文芸月刊』 創刊号
初升的太阳	物語世界外の語り手、介入するタイプの語り手	心理描写５、情景描写２	クロノス的な時間構造	３章構造、農業社の優越性を認めない老人が実例を目にして自らの過ちを認め、入社を決意する物語、【設定⇒問題⇒解決】構造あり	1954年９月20日 『山西日報』
缺粮户	物語世界内の語り手、「我」が「我」自身の物語を語るタイプ、語り手が語りかける相手は“老李”	心理描写６、また語り手の独白と区別がつきにくいものも多数存在する	物語全体が「私」の回想であるが、クロノス的な時間軸をもっている	語り手「我」が不当に食料を転売しようとする息子や村人を告発する物語、【問題⇒解決】構造を持つ。	1955年 『山西文芸月刊』 ７月号

谁是放火者	物語世界外の語り手、「介入する」タイプの語り手	情景描写２心理描写５、比較的詳細な描写が存在する。	問題の発生【放火】⇒問題の背景【放火犯の動機】⇒謎解き⇒問題の解決？	５章構造、現状に不満を持つ元地主による放火事件を描く、【問題⇒解決】構造はあるが、解決部分が明示されない	1955年『山西文芸月刊』９月号
过时的爱情	物語世界外の語り手、ただし主人公に強く肩入れする“論評する語り手”	心理８人物３、詳細な心理描写が多用される。	クロノス的な時間構造	３章構造、周囲がうらやむ結婚をしたヒロインが、夫の裏切りを受けて離婚するまでを描く、【問題⇒解決】構造は見いだせない。	1957年『火花』２月号
难忘的印象	物語世界内の語り手「我」（老李）が「我」自身の物語を語る	心理描写７、人物１情景１	「私」による一昨年の出来事の回想、回想自体はほぼ直線的な時間構造	任務に赴く途中で知り合った友人の印象を語る、【問題⇒解決】構造は見いだせない	1957年『火花』７月号
好人田木瓜	物語世界内の語り手、ただし【「我」が他者の物語を語る】タイプ	人物描写１心理描写４比較的詳細な描写が用いられる	中軸となる事件はクロノス的な時間構造	弱気な主人公田木瓜が食料泥棒を目撃し、脅しを退け告発する物語、【問題⇒解決】構造あり	1958年『火花』１月号
老长工	物語世界内の語り手（老李）、聞き手として耳にした郭在前老人の語りを内包する	情景１人物２心理６	１章、３章が「我」（老李）が目撃した【問題⇒解決】の物語であり、２章は「我」（郭老人）がなぜ老生姜を殴ったか、過去にさかのぼって解き明かす“謎解き”の物語	語り手「我」が郭在先老人の半生と問題社員を殴った事件の顛末を語る、３章構造、【問題⇒解決】構造あり	1958年『人民文学』３月号

作品名	語り手	描写・叙述	時間構造	物語	掲載雑誌・紙
唉，这伙年轻人	物語世界外の語り手、「感情移入する」タイプの語り手	叙述優先	クロノス的な時間構造	赤土の農地の土壌改良をめぐって競争する若者と老人たちの物語、「間違った競争意識とその矯正」という【問題⇒解決】構造が存在する	1958年『火花』５月号
临时任务	物語世界外の語り手、「感情移入する」タイプ	冒頭に情景描写、素朴な心理描写５	ほぼ直線的な時間構造	大峪ロダムの工事現場で奮闘する労働者たちをたたえる物語、【問題⇒解決】構造が存在する	1958年『火花』９月号
多年的愿望	物語世界外の語り手、「感情移入する」タイプ	心理13人物２情景１	過去の回想が挿入されるが比較的単純な時間構造	４章構造、主人公白三海用が水路工事を通じて長年の夢をかなえる物語、【設定⇒問題⇒解決（大団円）】構造が存在する	1959年『火花』４月号
拐先生李步高	物語世界外の語り手、「介入する」タイプの語り手	人物１心理３、シンプルな描写	過去の回想が挿入されるが比較的単純な時間構造	自らの体を顧みず治療活動に奔走する医師李步高の物語、【問題⇒解決】構造は存在しない	1959年『火花』７月号
权利下放	物語世界外の語り手「介入する」タイプの語り手	心理４但しシンプルな描写	クロノス的な時間構造	公社の倉庫管理人と社員の対立の物語、【問題⇒解決】構造あり	1959年『火花』８月号
大事业	物語世界外の語り手「論評する」語り手	人物２心理４	回想が随所に挿入される	３章構造、管理区の合併をめぐるトラブルを描く、【問題⇒解決】構造あり	1959年『人民文学』10月号

于得水的饭碗	物語世界外の語り手「感情移入する」タイプ	人物３心理５	過去の回想はあるが比較的単純な時間構造	公社食堂の閉鎖と再会を描く、【問題⇒解決】構造あり	1959年『火花』12月号
迟收的庄禾	物語世界外の語り手「論評する」語り手	心理７情景１	過去の回想が幾度も差し挟まれ錯綜した時間構造	隠れて開墾した土地の収穫に悩む農民を描く、【問題⇒解決】構造あり	1962年『火花』11月号
玉成老汉	物語世界外の語り手「介入する」タイプの語り手	情景１心理４人物１冒頭に情景	冒頭の設定から直線的にストーリーが物語られる	生産隊の仕事そっちのけで自留地に拘る玉成老人を描く、【問題⇒解決】構造なし	1962年『人民文学』12月号
清风习习	物語世界外の語り手「介入する」タイプの語り手	情景２心理２人物１冒頭に情景	過去の回想が幾度も差し挟まれ錯綜した時間構造	文化大革命期に夫を殺された女性が仇の逮捕をきっかけに心の平安を取り戻す、【問題⇒解決】構造なし	1982年『山西文学』10月号